

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話 03) 337714649

振替 東京 0158431 労金 東京 労金本店 No. 1154163

FAX (03) 329915367

購読料 月額 600円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言

人間的 魅力とはなにか 2

「護憲懇談会」への結集はじまる 3

——護憲ネット、全面協力・支援体制——

◆全国の仲間へ◆

反合理化闘争の今日的課題 灰原茂雄 6

吹き荒れる合理化の嵐 11

——国鉄闘争全国化の時期——

◆投稿◆ 一九九五年五月二七日 12

こんなに企業につくしてきたのに 13

——陸続とつづく中高年への首切り——

向坂逸郎先生と北海道 14

——私の心の中の向坂先生——

読者からのおたより 15

◆好評発売中 上野建一著 社会通信刊◆

政界再編後を読む——護憲の旗を掲げて

A6判上製、二百頁、千五百円（千三百十円）

刊 旬 社 会 通 信

NO. 607

一九九五年六月二十一日発行

一九九五年六月二十五日発行
(毎月一日・十一日・二十一日三回発行)

■ 巻頭言 ■

人間的魅力とはなにか

ある先生の話がきっかけとなって、今年に入ってから、「人物議論」や「人間の生き方」なるものに関する本をたて続けに何冊か読んでみた。

例えばこんな本を。「わしの眼は十年先が見える——大原孫三郎の生涯」(城山三郎著・飛鳥新社)、「もう、きみには頼まない・石坂泰三の世界」(同著・毎日新聞社)、「粗にして野だが年ではない・石田禮助の生涯」(同著・文春文庫)、「へこたれない理想主義者——大原惣一郎」(井上太郎著・講談社)、「わが友本田宗一郎」(井深大著・文春文庫)など、他にも、「ゴヤ」、「モーツァルト」、「レーニン」、「チャップリン」等々。

どれも人間的に「大きな」人物であり、実に面白く、魅力的な内容だった。こんな「人物評論」なるものを読んでいると、「いったい人間的魅力とは何んだらう」と、改めて考えてしまう。

こんなことを考えているある日、書店を歩いていたら、「人間的魅力の研究」(伊藤肇著・日本経済新聞社刊)というのが眼に入った。早速買って読んでみた。この本は、書店の「ビジネス書」欄に置かれていて、私など労働者は素通りしてしまいがちで、「事業家」や「経営者」と言われる方がよく読んでいるものだろう、と思う。

しかし、この本を読んで感じるのは、私たちの組織づくりや仲間づくりにあたって、人を見るうえで学ぶところが大きいにある。いわば人を読む「哲学」とでもいってよいだろう。この本の中には、こんな見出しがある。

「友を選ばば：性格・気質を第一に」、「性格こそ魅力」、「心ひかれる言行一致の人」、「好きも嫌いも、ただ「相性」ゆえ」、「歴史の大局つかんだ人間の潔さ」等々、どれも、読むことを誘っているかのようである…。

例えば、「性格こそ魅力」についてはこう書かれている。

「主義とか、主張だとかは、それを信じている時には、きわめて強いもののように思われるが、一朝にして変わってしまう危険性もあるのだ。したがって、主義主張で友人になると、それが一変したら最後、仇敵になってしまう。ところが気質とか、性格とかは大体、一生変わらない。ということは、生涯の交わりを結ぶためには、気質、性格を互いに気に入り、認め合えるようなものでなくてはならない。つまり、互いの人格の中で共鳴し、魅力を感じ合い、結合したものが永遠の友である」と。

私たちのなかによくこんなことがある。「喰わず嫌い」、たぶんこういうことだろう。実際喰いもせずして、自分相手の「先入観」で嫌いと決めこんでしまう。

人を見たり読んだりするにも、同じようなことが言えると思う。あいつは「○○党」、「○○派」、「○○主義者」だから、とか、あるいは、主義主張のみを取り上げて、はじめから「レッテル」をはり、「先入観」や「偏見」によって物事を見ってしまうくらいが往々にしてある。こんなことでは、自らの精神的広がりや豊かな心は開けないと、この頃つくづく思うようになった。

私たちは生きていて、人との出会いも様々にあるし、ましてや大衆の「運動」を続けている身にとっては然り。しかも、その指導的立場に居る人間にとっては、目先のことにこだわることも場合によっては必要ではある。むしろ、大局を見据えて物事を見、人間的に魅力のある、豊かで幅広い人であらねばならぬと思う。それに、相手の立場や地位が違って、人間的魅力を掴める懐の深さと広がりも養いたいものである。

(M)

「護憲懇談会」への結集はじまる

——護憲ネット、全面協力・支持体制——

「戦後五十年の国会決議」の意味

ようやく「戦後五十年の国会決議」の与党案に「植民地支配」と「侵略的行為」という言葉が入った。しかしこの程度の内容の決議をすることがどういう意味があるのだろうかと疑問をもつ人が多い。たしかに「深い反省の念を表明する」とはいつているが、全体としては第三者的文章になっている。ことに日本の植民地支配と侵略によって塗炭の苦しみと残虐行為の犠牲になったアジアの諸国民がどう受止めるだろうか。各国の政府は一応の評価をしているようだが、それぞれの国の国民は当然「加害者日本」の意識の薄いことに改めて驚くことであろうし不満をもつことになろう。本来は明確に「謝罪」し、おわびの示しを具体的にしなければならぬはずである。日本の戦争責任をあいまいにしてきた戦後の政治が自民党をはじめとするタカ派の存在を今日なお残しているのである。中曽根、渡辺、奥野の各氏に代表される歴史観は、天皇を中心としたアジアの支配（帝国主義）を正当化するもので、五十年以上前の東条元大将・首相等となんら変わるものではない。

タカ派の場合、歴史観もさることながら歴史的事実を認めようとしないことと「反戦」の意識がないことにはアゼンとする。遺族会という圧力団体を盾にした橋本通産相（旧金丸・竹下派）の言動は厳しく批難されなければならない。この人が自民党総裁候補であり、将来首相をねらっているというのだから、自民党政治の基本は村山内閣後も少しも変わっておらずに、むしろ反動性を一層強めているようである。少し長期に政治を考えるならば、日本で一番政治的支配力をもっている政党は自民党であり、次の小選挙区制の総選挙によってこの党はさらに強化されることになる。自民党の政権復帰とその強化を助成したのが社会党であったという事実を振り返るならば日本の政党史上大きな禍根を残すものであり、社会党にとって最大の誤りになると思う。

社会党はかつて「新宣言」を決定するとき、左派活動家の意思として「安易な保革連合政権はとらない」という大会決議を行った。しかし細川内閣と村山内閣はまさにその保革連合政権である。安易に選んだ政権の道によって社会党は今崩壊しようとしている。丸ごと解党（流れ解散）への坂を転がりはじめている。不幸にも左派の「危惧」は現実のものとなった。いわゆる新無党派層はたしかに政治的には無責任性を持っている。しかし自民党や既成政党批判に見られるように政治意識は低いわけではない。マスコミに誘導されやすい弱点をもちながらも正しく問題点を突いている。東京都知事選では自民党と社会党などのナレアイ（相乗りも含めて）政治への批判がきびしく表面化したものであった。政治権力の悪の根源は自民党であり、官僚であり、財界であることを意識している。これと闘わない社会党は存在意義がないという。どんなに立派な政策や理論を掲げても、「悪とのたたかい」を放棄した社会党にはいささかの魅力もないのである。

国会での「五十年決議」を意義あるものにするためには、まず自民党や財界に巣くう「皇国史観」・「新保守主義」と全面的に思想闘争を展開することである。戦後五十年の今年こそ「反戦・平和」「天皇の戦争責任」「改憲のねらい」「アジアをはじめとする諸国

民との共生とは何か」「安保体制」などについて護憲の立場から「理論と実践」を実行すべきである。学習と交流の機会である。

「護憲懇談会」と社会党の再建

社会党は新党結成に向けての準備をすすめる「新しい政党づくり推進本部」を設置することを六月八日の中執委で決定した。構成は全中執委員とこれに代議士会長、参院議員会長が加わるもの。本部長は村山委員長、副本部長は井上副委員長、事務局長・久保書記長となるという。

新党との関係ではすでに学者・文化人による新党準備会世話人会があるが二本立てで正式の新党準備会にもってゆこうということらしい。というのは、党内から新党準備を党外の学者文化人という人達に任せることでよいのか、中執は無責任ではないか、などの批判がでたことにより、全党で（丸ごと新党）新党へという意欲を見せようということになったもの。しかし一部を除けば新党づくりを本気で考えているものはなく、新党への手順が定まらない。解党・新党結成の時期はなおさら決まらない。全ては参院選後となる。マスコミを含めての政界関係者は、社会党が参院選挙で惨敗すれば、新党どころでなく、流れ解散的方向に進むだろうと見ている。惨敗すれば村山内閣も退陣に追い込まれると読んで、惨敗に期待かける各政党（自民党タカ派、新進党、共産党など）も当然あるわけである。

惨敗となれば社会党内でまず最初に動き出すのは田辺・右派グループであろう。党外にある山花グループと一緒に新党結成を開始すると田辺氏は発言を繰り返している。新党のインシヤチブをとるためには、先行して行動を起しておく必要がある、加えて自分が先頭に立つことで一部労組や党内最右派が新党に走ると思い込んでいる。

一方横路前北海道知事は、ブロック政党（全国の衆院比例区一ブロックごと）の結成によって社会党の新党と結合しようとしており、社会党北海道本部は全面的に一体化しようとしている。関西にはすでに連合主導の地域政党が生れつつある。これらが成功するかどうかは参院選の結果、そして最終的には次の総選挙の結果に待つしかないのである。

この様な事実上の社会党解党が開始された全国大会終了後に発足したのが「護憲懇談会」である。「護憲ネット」はこれに全面的協力し、危機を超えて解体のなかにある社会党の新たな再編・再建に本格的に乗り出せるよう全力をあげることにした。

護憲懇談会は矢田部、秋葉の両国会議員を先頭に、十人の国会議員の呼びかけで開始された運動体である。しかしこの党再編・再建の運動を成功させるためには、全国的な護憲派の結集が必要であり、言葉だけでなく積極的な行動・活動が必要である。困難ななかでの問題点を検討してみよう。

(一) 護憲新党をめざすのか

護憲の政治勢力を結集して勤労国民の人権と生活の向上、福祉と環境の改善をはじめ人間にやさしい社会をつくるためには、しっかりとした革新政党が必要である。日本社会党の憲法の理念をしっかりと政治に反映させる基本政策をはじめとした社会党らしき・革新性をあくまでも守り発展させることが第一に重要である。したがって単なる護憲新党ではなく、あくまでも護憲社会党の再編であり再建である。

リベラル新党へ向けて、解党へのみちを歩み始めた今の社会党総体としては再生は無理

であり再編なしでは再建はできない。そのため、再編・再建の司令塔としての中央部隊が必要である。しかもそれは国会議員は五人以上、理論・政策を担当する学者文化人、大衆組織と勤労国民との結合をはかる労働組合幹部・活動家代表、護憲派地域代表などが総合的に結集することが重要である。

党大会後の現在は、党再建にとっては過渡期であり、再建のための準備期間である。しかも参院選の最中でもあることも考えると、社会党内にあるものは、できるだけリベラル新党へ、あるいはバラバラに離党ということにならないようにしなければならない。横堀千葉高教組委員長のように、「新党参加拒否宣言」（前号、「巻頭言」参照）を行って署名を募ることなどの運動が必要である。機関（大会）で決ったことから組織を挙げて新党へ（丸ごと新党）という意見もある。大政翼賛型の意見である。また大労組、所属労組が新党だから、という「組合主義」の考え方もある。しかし、それではリベラル党に保守二党と対決できる新党となるのか、となると展望もなければ現実性もないのである。「護憲ネット」の方針による再編・再建しか道はない。

「護憲懇談会」も「護憲ネット」も一体のものとして頑張ることである。少数派からの出発になるが、情勢は正しく護憲派の指す方向に進んでいる。大衆運動と大衆組織を大切にしながら前進すれば、社会党の再編・再建は益々明るいものとなる。

（二）「護憲懇談会」のめざす手順はどうか。

社会党は参院選挙での大敗後は大混乱の時期に入る。そのとき今までの準備も含めて、再編（党内護憲派と党外護憲派の結集が具体的に拡大される）の具体的動きにしなければならない。そのとき直ちに護憲社会党（仮称）になるか、それとも護憲政党準備会になるのかは、そのときの情勢によるわけである。しかしいずれにせよ、大衆運動と日常の政治闘争のできる組織は結成されなければならない。

これらの意思統一をはかるのが、護憲懇談会の八月の「合宿」である。それまでに地域、グループ、労組、護憲ネットの各グループの結集した活動が重要である。また国会議員団も意思統一が必要である。意思統一をおろそかにして思惑や個人的展望で行動するとやがて孤立する。孤立しないためには仲間を信頼し、自らが犠牲的精神を発揮することである。

（三）労働組合の対応はどうなるか。

大労組十七単産（自治労、電通、全通、電機、ゼンセン、鉄鋼、教組など）は、大筋で参院選後の新党へ進もうとしている。しかし丸ごとの新党はむずかしいとらみ、「横路新党」に期待するところ、田辺・山花新党と共に動こうとするものなど、かなりバラツいている。そこには、やはり社会党は流れ解散になるのかと見る人達と思惑の違いが大きな要因となっている。

われわれ護憲派は社会党の再編・再建めざしてあらゆる事態に備える組織的準備を急ぐことである。

（政権研究班）

◇全国の仲間へ◇ 反合理化闘争の今日的課題

灰原茂雄（元三池労組書記長）

全通の仲間の冊子に灰原茂雄氏の講演録「反合理化闘争の今日的課題」がのせられていた。氏の大きな経験を現状と重ね合わせ、労働運動再生にかける想いが聞こえてくる。

全通の仲間だけのものにしておくのは惜しいと考え、掲載させていた。灰原さんお元気かなと思われている読者も多いだろう。三池闘争の経験を学び直す機会に：。

（編集部）

はじめに

今日ほど「リストラ」などとカタカナ的に軽称されながら、実際にはかつてないほどに「資本主義的合理化」が首切り・賃下げ・労働強化さらには国労攻撃に見られる「差別・組織」攻撃など含めて「猛威」をふるっていることはまさに異常的です。しかも、これは国鉄労組にとどまることなく、幅広く全般的だと考えます。

私は全体的な「後退・停滞」の中で、あらためて「反合理化闘争の今日的課題」を追求しようとする全通東京の仲間の皆さんに敬意を表し、共に「今日的課題」を学習したいと思つて今日は参加しました。

三池は古くなったか

日本の労働運動くらい総括運動がへたな組織はないと思います。しかし不十分でも「次の闘い」という見地で、私としては総括運動に一生を費やす気持ちでいます。

賃上げ闘争で炭労は一九五二年十月に一斉無期限ストに入った。いわゆる「六三スト」ですが、なぜ秋にやるかと言えば、昭和二七年頃は列車もガスも電気も、重要産業は石炭を使っていたし、家庭でも石炭ストーブを使っていました。石炭の需要は秋から冬に上がる訳です。全通も年末に物溜めをやったのと同じで、石炭需要期を単純に考えたのです。朝鮮戦争特需で景気も良かった。そこに甘さがありました。物溜めを三池もやったわけですが、大小四〇〇の炭鉱があり、現地に貯炭場がある。その石炭の山を見て「何日分がある」と見てストをやった長期ストになり、結果六三日間闘い大手のどの山も石炭を出さなかつた。確かに石炭不足は深刻さを加えて有利に見えました。

その時「総括運動」をやりました。七%賃上げは取つたが六三日間の無期限ストで賃金は出ないわけですから惨敗でした。ストの影響で交通も止まり、効果があると思つた。六三日も生産ストップをしたが弱点はあつた。どういうことか、国内の炭鉱のことばかり見ていたわけです。しかし、政府は中国・カナダ等に緊急輸入を要請した。だから、ストの効果は減少したわけです。結果、緊急調整で労調法によりスト禁止が出されました。

もう一つ、常磐炭鉱出身の炭労委員長のお膝元で「こんなストにはついて行けない」と反対が起こり、炭労から常磐は脱落していくのです。そのことを見ても、ストさえすればよい。勝てる要求が取れるという考え方だけで、労働運動は出来ない。一カ月余りのスト

で、賃金は無いから日雇いしながら食っていく苦勞もありました。しかし、政府は石炭を輸入する成果がないと言う中で、敗北に学びまじめに炭労としては総括を實踐しました。翌年（一九五三年）三月伊東市で炭労大会が開かれたわけですが、われわれ左派を中心として、きびしく、一つの課題として「負けた闘いをキチンと総括する」ということがありました。失敗した六三ストの自己批判をすることがないと「次の闘い」ができないということでした。大会の中で「自己批判書作成委員会」を作った。

当時、私は三池本所支部の専従でした。この小委員会の委員長になった。大会の議論を連日まとめては返すという繰り返し返し議論の中でまとめ、最終日の炭労大会で「草案」を全文みんなに配布し、なおかつ意見はありましたが、次の闘いはこうだと、示さないと納得しないと主張し、小委員長の私とその全文を朗読しました。自慢して回想するなどはなしに、四〇分もかかりましたが、このことは大事なことだったと忘れることは出来ません。

今日のような、歴史的に重要な時期の中で全体的に振り返って見る「総括運動」を、日本労働運動はやっていません。全通は「三〇年総括」をして「企一・二号」を捨てました。それでいいのかどうかということです。決して炭労の自慢話ではなく、「総括運動」の重要性を言っている訳です。炭労の総括の中には一カ月の貯炭量だけみた出炭ストップ戦略は間違いだ。ストさえやれば良いというのも間違いと言っています。相手は、国際的にも見ている中で、国内の石炭事情だけで判断するなども言っています。

また、次の闘いとしては、生産ストップするだけでなく、その前段階で準備された職場闘争をやり、多様な戦術の行使、例えば法律を無視していることを順法闘争で守らせるとか、温度が高い所では掘らないとか、ストだけではなく日常闘争の追求などを重ねて闘争力をつくり、高めるといふこれからの方向・戦術を含めて総括し提起しました。

六三ストから「英雄なき百十三日」へ

その総括が生きているのが、昭和二八年八月七日からの、三井鉱山の大量人員整理の発表、「英雄なき一一三日の闘い」としての首切り反対闘争でした。今日でも、バブルがはじけ、リストラが起こっています。当時は、朝鮮ブームが終わり、需要が落ちたから人減らし、首切りというわけです。赤字宣伝で石炭ブームは終わったとして、三井以外は、希望退職を募ったのに対して、三井だけは指名解雇を発表しました。三井鉱山は北海道に三つ、九州に三つの炭鉱を持って、全国の一・二%の生産量と全体で五万人が働いていました。

なぜ三井だけが指名解雇をしたか、敗戦後まもなく我々は、「向坂教室」で学習をやってきましたから、三池の職場闘争は理論と実践の統一をめざしました。単に物とりではなく、労働者の解放・民主主義を基礎に「人間らしく扱え」とやってきたわけです。全通もそうでした。「権利の全通」と言われ、同時に他の単産、国労からも学びました。だから三井鉱山だけが本気で六山で「指名解雇」（四五六三名）を強行してきました。

三井は、やりすぎもありました。たとえば鉱員組合も職員組合もそれぞれ十%づつの首切りでした。今のリストラ合理化も同じにやりすぎです。国鉄もそうです不当労働行為を見過ごすことはできません。三井では、このやりすぎは「統一闘争がやりやすい」こととなり、全ての職場で統一的に全力で反撃できたわけです。それは、順法闘争であり、半年前の「六三スト自己判断総括」を受け止め生かしたからです。

われわれは、一一三日のストをやりましたが、二四時間ストは二日だけで、あとの一一

一日は職場闘争で前に述べた大衆闘争です。残業拒否・休日出勤拒否その他多様な戦術を使いましたが、中心は賃金を受け取りながら闘争するという事です。採炭は請負給ですから、働けば金になりますから昼休みも取らないで働く、せつかくの法律も無視することになります。この闘争では一斉に休むようにしたことなど、「六三ストの自己批判総括」が生かされました。総括とは次の闘いのためにやることです。

一―三日の闘いに活かされた結果、首切りを撤回させました。四五六三名の指名解雇だったが、結果として、一八四一名(三池三―三名)を白紙撤回させ職場に復帰しました(二七〇〇名が途中で退職)。

そこで、どう総括したかです。指名解雇基準の中に、たとえば労働者が過去三ヶ月で、三回以上負傷した者は「公傷常習者」というのがありました。私傷ではなく、保安を充分にせずに「働け・出炭だ」と強制しておいて、公傷になったという仲間に対して「常習者」というのです。許せることではありません。こうして「六三スト」の失敗を総括して、次の闘いへと連続した闘いを作ることができた。総括が活かされた実践でした。

資本の姿勢は変わらない

七四年に大幅賃上げがありました。石油危機の中のモノ不足のインフレのなかで総評は、七三・七四年闘争を頑張りました。ところが今度は相手が、総括して「企業は生き残れない」ことを打ち出した。それともう一つ、日経は「自由経済の危機」を主張しはじめました。「賃上げはインフレを助長する」とも大々的に展開しました。七四春闘後、資本は総括して反撃に転じたわけですが、その反撃は七五年の八日間のスト権ストに対して「二〇二億円損害賠償請求」を国労に出しました。今日、二〇年経った今もその攻撃は生きているのです。我々はストが終わると忘れてしまうのですが、敵はそうではないのです。

第一に、かつて全通は「階級的労働運動」の指針を内外に提起しました。「企一―号・職場闘争の進め方」「企二―号・反合理化をたたかうために」、この二つは、今日的にも再学習すべき歴史的提起であることをお互いに確認し、その今日的補強を現実のきびしい攻防の中で正しく、早急にすすめるべきであると私は確信しています。しかも、この二つの指針は大きくは「職場のたたかい」として一括されて七三年十月に全通労組から提起されました。なぜ今も有意義なこの指針が、全通労働運動で重視されていないかということについて、全通労働者自身の大衆討議がいまこそ徹底されるべきだとあえて提言したいと思うのです。

第二に、三池の総括についてです。私たち三池労働者にも「長期抵抗・統一路線」という反合理化闘争指針があり、この際、その重視と再学習もあえて提起したのです。その補強・発展を求めたいのです。「六〇年安保・三池」と称された、あのきびしい「総労働・総資本」の対決の中で、しかも一歩後退の中での提起でした。ここでの合理化について分析を「原型」として、次には「体制的合理化」をキチンと見極めて三池的に確認をしました。

原型としての、この表示は、組合員や家族にも分かりやすくしました。資本主義合理化の原点はここであるし、反対闘争の基本でもあると思います。これを補強するのは皆さんです。若い仲間を含めて話し合って欲しいと思います。

組織は人がつくる

第三に「長期抵抗・統一路線」とは何かについて、二―三の提起をいたします。

「体制的合理化」としたことは「階級闘争」としての視点を堅持したことであり、強制

される「企業内」的視野の脱皮・脱却を歴史的・実践的にあらためて訴えたことです。そして「反マル生」は、「生産性向上運動」をその後も独占企業側が全力で貫徹している「現実」と「実態」を重視し、次の諸項目をも重点としました。

「五人組制度の確立」は「抵抗の組織としての確認」であり、資本主義的合理化を体制的にとらえた以上、階級的労働運動の強化・推進を根本課題としました。

構え方は、①情勢が悪いときは、柔軟な構えを、②しかし、敵の脆弱点（やりすぎも許さず、見逃さずに）には、思い切りつけこむ。後退ばかりしてはおれない、③柔軟な抵抗の中で「反撃」を開始することです。

「五五年体制の終焉」とか言われていますが、五五年二月に日本生産性本部が作られ、資本主義的合理化の貫徹を任務としたものです。「機械化や技術革新に反対するな」「儲ければ成果の分け前をやる」と主張しました。終焉なんてしていませんね。資本主義は生産を上げなければ利潤はできない。したがって、資本主義であるかぎり合理化・首切りが続く中で、資本主義の原則と闘うことが、反合理化闘争です。闘い方は「長期抵抗・統一路線」しかありません。問題は、ずるがしこくて強力な資本主義のカベとの闘いであり、間違えば不当きわまる分裂攻撃もうけることとなります。そのために、三池の「長期抵抗・統一路線」では「反撃に転ずる条件」を設定しました。

一つとして「大衆の信頼が指導部に集中しているか」ということです。今日の情勢の中で、労働運動を作り上げるなら、きびしくてもやはり反合理化闘争しかないのですが、組合員大衆のヒソヒソ話しや、活動家の声もそうですが連合幹部批判ばかりです。あるいは党幹部の批判だけで、上だけみて批判しているのですが、それだけでいいのでしょうか。うまく行っていないから批判するのは確かに簡単です。逆に言えばいい指導部をつくる。いい役員をつくる。この努力がいかにか成されているかが重要な点です。「役員選挙」はどうなっていますか。もっと自信をもって真の活動家の皆さんが今こそ、役員に出て欲しいと思います。役員選挙に当局はつるんでいないかどうか。つまり、役員選挙は大切なそして初歩的な階級闘争だということです。党にしても労組にしても大衆は、今の指導部でいいと思っています。ところが、アイツは共産党だ、協会だとなっていて大切な指導部をつくり得ずに、将来は国会議員だという人だけをお互いが安易に出しているのではないのでしょうか。大衆を信頼して、当局にいらまれても頑張ることが必要です。いい役員を選ぶことがやはり出発点です。

敵を知り己を知る

二つは、「味方の志気が旺盛かどうか」。立派な役員を選ぶには、いい組合員がいなくてだめです。これまで自民党を選んできたのは、我々自身だ。組合運動も春闘も総括しないで「でかいことはいいいことだ式」連合になりました。一人ひとりの組合員をつくるのが大切です。

三つは「反撃に転ずる手段と目標をどう選ぶか」。今の課題で言えば、「護憲」「民主主義闘争」をもっと正面にだすことだと思います。

四つは「敵の脆弱点の分析と把握が十分かどうか」。職場にアンテナを高くということ。相手の弱さは首切りです。誰でも反対することを正しくつかむことですが、相手のボロは一杯あります。相手の弱さについて議論していくと「組合バッチを付けるな」とい

うような許せない攻撃も明らかになります。

階級闘争は、ひゆ的にいいますと、家庭でもあります。憲法問題が重要な時期にあって、十人の組合員が家庭で憲法・民主主義を話している人が何人いるでしょうか。

五つは「以上のような諸条件が具体化し発展する度合に応じて大胆な反撃に転じる」ということですが、我々の戦線を整備するには正しい路線議論を、いまこそしなければなりません。

憲法の理念を職場に活かす

六つは、一般国民の生活と権利を抑圧する反動政治の露骨な横暴さが、同時に首切り合理化を生むのですから、そのためにこそ「政治闘争の積極化」を追求するということです。七つは「われわれの当面の目標」として人間尊重は最大の人権問題ですから、反撃の条件の一つとして「おれたちは命まで売っていない」としました。

憲法を守るためには、戦争に反対する。戦争になれば生命は重んじられませんから、職場からの護憲闘争がいよいよ重要となります。また「職場の反ファッシュヨ闘争」としましたが、それは「党の問題ではないか」という意見もありますが、人命軽視・憲法蹂躪（じゅうりん）の職場実態、協約無視、慣行剥奪そして組合切り崩しや差別の不当労働行為を「職場労働者の護憲闘争」として重視しなければなりません。

相手もボロを出している最近の状況についてふれますと、社会党と自民党が連立すること、だんだんと駄目になっていきますが、相手は七〇人の国会議員しかいないのに社会党に総理大臣を渡しているのです。そのことは独占や自民党の弱さだと思えます。第二第三の自民党をつくり、第三次連立内閣が生まれましたが、独占資本は大変な危機感を持っています。一党だけではもたないわけです。フトコロが深いとも言えますし、油断もありません。

資本主義を守るために、社会党を引っぱりこんで総理をやらせたことを、どう我々が考えるかです。捕虜になつては駄目なことはハッキリしています。労働者と連結した党を強めなければなりません。今、社会党の悪口をあれこれ言っているのは、マスコミだけではありません。スポーツ新聞でもへたな政治批判をしつこく繰り返しています。よく読むと政治不信を煽っている内容となっています。政治に大衆の非難や反感を抱かせる動きは、ファッシュ化の方向でもあることを注視したいものです。なぜ、社会党に総理を渡したのか、相手の危機的な立場も考えてみる必要があります。だからこそ、いよいよわれわれが本当の意味の党をつくることです。

労働運動

われわれは、日本の労働者として、マルクス・レーニンの学習をしています。初歩的なことをいいますが、お互いの欠陥かもしれないませんが、やり足りないことは「でっかいことはいいことだ」と昔から言われてきて、権威に反対し反抗できないことです。

もう一度、原則にかえて、階級闘争の立場で、現実の労働運動の中で「長いものに巻かれる」「でっかいことはいいことだ」という弱点についても、もっと率直に人間的に論議したらどうでしょうか。

連合になった時、総評はなぜ解散したのか。連合とは何か。反合理化闘争はどうなるの

か。総評とどこが違うのか。総評運動の何が悪く、何が良かったのか。などについて、つまり総括についてよほどしっかりとしている所は別ですが、多くは職場の議論の積み重ねがないので、七〇年代に宝樹氏が言った反階級的な労線統一が現実のものとなったのです。だから考えて欲しいのです。

総評ができる時も「でかいことはいいことだ」と「労組は質より数である」とも言われ「でる釘は打たれる」とも言われました。

全通は立派な歴史をもった大組合です。いま各位が意識しなくても大組合の伝統はあるのです。国会議員は大組合から出る。県会議員も地方議員も、国労・全通・自治労が多いですね。立派な人も少なくないのですが、「大きなことは」という事大主義は、言葉を変えて言えば、成金主義です。学歴もそうですね。ただ一流大学がいい。何が一流なのか。ようか。

繰り返して言うのですが「でかいことはいいことだ」でいいのでしょうか。路線や思想は別で、何でも大組合が責任を持てばいいはずがありません。総評廃止もそうです。今日の社会党もそうです。他の政党と一緒に路線や方針を変え、少数を切り捨てるのですから、賛成できません。

もっと身近な問題を含め考えるべきです。組合員と国民の声を大切にすべきです。いま全通が出している「全郵政との組織統一」や大産別構想も数が多ければいいという事になってしまっています。組織拡大についても、どういう方針で労働運動をやるかです。路線議論がなく「でかいことはいいことだ」ではならないと思います。労働運動の質も問題、もっと階級運動ということを考えて欲しいことを最後に申し上げて、結語と致します。

吹き荒れる合理化の嵐

——国鉄闘争全国化の時期——

五年ぶりに岩手路をオルグ

「解雇撤回・JR復帰」をめざす国労闘争団の九五夏季物販全国オルグとして斉藤孝団員と共に五月十三日から二十七日まで受け入れの岩手県の各地に入り国鉄闘争の現状と支援の要請を訴えさせていただきました。

五年ぶりの岩手路のオルグで訴えたことは、①新宿車掌区差別事件で最高裁の勝利判決や「二〇二億円損倍訴訟」の取り下げ和解で新たな局面——国労闘争の全面解決実現の正念場を迎えている情勢。②国労帯広闘争団（家族会）の現状と「生活・闘争」体制強化の課題——国労生活事業センター「アルバ」と帯広闘争団の（有）「スモークハウス」の売上、販路拡大。③「連帯する会」帯広地方事務所開設の努力と会員拡大の願いなどでした。

憲法記念日の五月三日、朝日新聞全国版の意見広告（「JRに人権を——〇四七人の復職を求めます。」など世論の高まりもあり、支援の単産、団体も真剣に話しを聞いていただき励ましとなりました。

国労組合員の想いが全労働者に

私たちの闘いは九年目に入り、国鉄「分割・民営化」十年を前に政治・経済状況も激しく動いています。特に岩手県で学んだことは、①リストラ合理化が他単産に拡がり、国

労闘争の全面解決に大きな期待が寄せられている。②「二〇二裁判の和解」で多くの労組から激励、しかしJR総連（東労組）だけ反対し、八戸運輸区で乗務前後の国労組合員を「説得行動」と称して罵声を浴びせる悪行は、旧労動の一部（幹部は「革マル」派）の暴力的体質そのもので、自己保身のあせりの現れである。③国労盛岡支部の「JR利用者」がきアンケート調査」による通勤電車の改善要求の取り組みは、国労として大切な運動です。地元の新聞も大きく評価しているように快適で安全な公共交通としての鉄道輸送の確保こそJRに求められている――などです。

急ピッチな動き

国鉄闘争に関わる動きは、急ピッチで五月十二日に運輸省首脳が国労に非公式に解決案（地元JR採用、即日解雇し広域採用など）が提示されましたが、国労の考え方は「解雇者全員の地元JR採用なしに解決はない」であり、共闘運動の分断を許さない大衆的闘いが、最大の課題になっています。

五月二十三日「千葉動労事件」で「JR不採用は正当」（JRと旧国鉄の同一性はなく、雇用関係もJRに引き継がれない）と高裁判決が出されました。この判決を利用したJR・JR総連のまさかえしが予想されます。しかし、これは国労と基本的闘いの出発点が違う事件なのです。むしろ、この反動判決を想定して、国労は採用差別など不当労働行為事件として労働委員会闘争で救済命令をつみあげて裁判闘争を闘っているのです。

不十分な中労委命令も「国鉄とJRは別法人でもかまわないが国鉄時代の不当労働行為の責任は承継法人のJRが負う」と明確にJRに責任があると断罪しています。

六月闘争に死力をつくす

六月二十九日のJR東日本株主総会で「一株株主会」の不当労働行為の防止、救済を主な目的とした定款改正の闘いや六・二六中央集会にむけた上京行動など全国各地で六月闘争に全力を上げています。

六月二十二日には、連帯する会の山下俊幸事務局長を迎え「全面解決実現・JRに人権を！十勝集会」を開催します。その成功にむけ、今キャラバン行動を行なっています。

岩手路で学んだことを帯広・十勝の皆さんに報告し、一日も早い納得のいく全面勝利解決を果すため、一層の団結と大衆闘争の強化に全力を尽くしているところです。

◆投稿◆

一九九五年五月二十七日

一九九五年の五月二十七日をもって、社会党とはおさらばです。でもひとりだけではおさらばしません。先日の統一地方選挙では、当中津川市議会選挙に我々の仲間（護憲派議員）が二名当選させることができました。労働組合の弱体化は、どんどんすすみ、大変くるしい選挙でしたが、真に働らく者の社会をめざす仲間の小さな団結体が中心となって勝利を勝ちとることができました。

いよいよ護憲の当のスタートです。

全国の仲間とともに岐阜の山の奥で、護憲の旗を高くかかげ、がんばってゆきます。

（帯広闘争団・佐野周二）

こんな企業につくして来たのに……

——陸統とつづく中高年への首切り——

結成総会がはじまる一時間前から「早すぎたかな。ピラ配布や会場整理など手伝おうと思つて……」と、出掛け先から駆けつけた人、遅い昼食をとりあいながら自分たちの生活の状況や事業に対する意見交換など結集する人たちの心意気がつたわつてきた。

管理職ユニオン第二回総会が開催された昨年一月二十七日から、特にテレビ報道（特集番組）で取り上げられ視聴覚から労働者・勤労大衆に訴えかけられてきた。一方的な解雇は許さないと団体交渉に応じさせ、事業化についても範囲を拡げてきているが、解雇で精神的な痛みを受け、失業者の群れに放りだされ家族供ども苦渋している場面であった。

総会で挨拶に立つ面々は、それぞれの立場から情勢のみかたを論じているが、自信をもって言いきるところから人格形成も企業に鍛えられ、労働組合のなかで成長していることが感じられた。

銀行産業労働組合員は、いま私たちの銀行の職場をみたときに五〇歳以上の人はほとんど職場にはいない。いるのは重役と銀行産業組合員だけで、ほとんどは出向である。さまざまな嫌がらせや退職強要があつて、一人ひとりが追い詰められて生活している。銀行に残つても大変で、毎日の仕事できびしく詰められ、五五歳を過ぎると賃金は半分で、職名もあたえられている仕事も代わり、能力や自尊心、人間の尊厳というものが剥奪され追ひ込まれた仕事につかされている。銀行では出向するのも銀行に残るのも、地獄のような銀行労働者の実態であると訴えている。

更に注目すべき点は「悲しい話だが、それでも銀行の話をされるとやはり腹立たしく思うし（会場内苦笑）、気持ちの根底には自分の銀行の発展を願う気持ちをたいへん強く思っている」といくら苦しめられても企業を愛する気持ちがひじょうに強い。

これは労働弁護団からも指摘され、一九九三年二月に開設した雇用調整ホットラインでは東京・千葉・埼玉から六〇〇件の相談があり、それまでの労働相談とは様変わりをして正社員で管理職で中高年、大小の企業を問わず相談が殺到したことであった。「次にあたる仕事はないからでなくていい」と言われて、管理職・中高年の人は俺は会社からいらぬと言われた、俺はダメなのかもしれないと思つてしまふ。キーワードは、管理職も労働者であるということであつた。管理職の組合を探したところ青森銀行管理職組合があり、他にも都労働委員会から認可を受けている組合もいくつかあつた。極秘であるが、管理職でいまの社長を追い出すために組合をつくつているところもあると言ふ。

労働相談は東京だけでも五万件、しかし裁判は二千件とほとんどが泣き寝入りになっている（三月四日の雇用調整ホットラインでは六二〇件の相談があつた）。スカンジナビヤ航空では日本従業員を全員解雇して再雇用し、「賃金を三五%カットするがそれでも残るか、ダメなら辞めてくれ」など労働条件の切り下げを一方的にせまっていた。

企業の求める能力、企業の求める業績を残せない人は要らない、企業のなかに終身雇用として残せる人はほんの一部の人で、多くの労働者は派遣労働者や下請けの労働者に、パートや嘱託の労働者になる。管理職とか一般職とかは問わずに、中高労働者は機関労働者化されていくというのが日経連の方針である。

全国ネットワーク結成は、企業の枠をこえて中高年の雇用や権利を守り、管理職などの

団体・労働組合の結集を訴え、ゆるやかな結集体として交流や情報交換をすすめ、共通する政策課題について調査・研究し共同行動をおこなうことになっている。

中高年労働者に運動を拡げて、話を労働運動の域にとられない自らの生き方を問い、社会に対してどのような働きかけができるのか考え、幅広い人たちのネットワークを作るとしている。中高年労働者の雇用と賃金について、行政サイド・日経連・経団連にたいして強く申し入れ、社会的にアピールしていくことにしている。

※参加団体は、青森銀行管理職組合・全国一般東京労組管理職ユニオン・アメリカンエキスプレス管理職組合・IPU分会・CSUフォーラム・反リストラ・マスコミ労働者会議 (K)

向坂逸郎先生と北海道

——私の心の中の向坂先生——

マルクス経済学者であり、日本の社会主義運動・労働運動を指導されてきた向坂逸郎先生が亡くなられたのは、一九八五年一月二十二日のことでした。八十七歳の生涯を終えられました。今年の九五年一月、先生が亡くなられて満十年が経ちました。

最近になって、改めて「向坂先生に学びたい」との思いで、主に十年前の資料（新聞のコピー、追悼の本等々）を一通り読んでみました。「向坂さんも生前『教えたことより、労働者から教わったことの方が多かった。あの経験が、今も私の理論を支えている』と、三池のヤマに愛着をみせていたという。」（八五年一月二十二日夕刊・毎日新聞の抜粋）。このように、やはり向坂先生は「思想には厳しいが労働者にはやさしかった」ことを実感することができました。

心に残る岩井さんの言

当時の北海道新聞（八五年一月二十二日夕刊）に元総評事務局長の岩井章氏が、「社会主義一筋の生涯」「向坂氏の氏を悼む」との一文を寄せているが、強い印象を受けたことを今でもはっきりと記憶している。まさに十年を経ているこんにち、私はこの追悼文を読み直しつつ、未熟な常に学習不足の自分を鍛え厳しく律していくべき内容であると痛感している。

◎「一八八三年、偉大な革命家マルクスが死去した時僚友エンゲルスは『人類が一つの頭だけ丈（たけ）が低くなった。人類が現代にもつていた最も偉大な頭だけ』と別れの言葉を述べた。

今向坂先生を失ったことは、日本の労働運動、社会主義運動にとって大きな損失となるだろう。

先生によって理論的にも実践的にもきたえられた活動家たちは、今後も相変わらず全国の職場で資本のあくなき攻撃に屈することなく闘いの先頭に立って闘い続けるだろう。

今日の労働運動、社会主義運動は、先生の意に反しますます右傾化している。だが独占資本が日本の労働者を丸ごと抱えこむことは決してできない。

資本家と労働者の階級対立は本質的になくなるものではない。その意味で向坂理論は今後も息ながく生き続けるだろう。

一九八六年の一月、札幌市で開催された「向坂逸郎先生を語る会」の「シオリ」に、向坂先生が「戦前・戦後」北海道に來られた時のことが「年表的」に簡潔にまとめられているので、「社会通信」北海道の読者はもとより全国の仲間の方々に紹介します。

〃向坂先生と北海道

- 「戦前」一九一〇年(M43)夏、十三年(T2)夏 お父さんの小樽転勤により、福岡県立八女中学校から、小樽中学校に転校。中学一年の夏から三年の夏まで二年間小樽で生活。
- 一九二九年(S4)～三十年(S5)頃 当時の「地代論」「日本資本主義の発達」に関する論争との関連で、約一カ月間、北海道の農村調査に入る。特に、江別・町村牧場には長期に滞在す。
- 「戦後」一九五四年(S29)頃 左派社会党綱領(一九五四年一月党大会で採択)のオランダのために、党本部書記・横山泰治氏と一緒に道内各地をまわる。
- 一九六二年(S37)～六三年(S38)頃 労働組合の学習会に出席し、活動家づくりに力を注ぐ。
- 一九六四年(S39)春 社会党道本部主催の党労働学校が定山溪で開かれ、「日本における社会主義への道」を講義。
- 一九六五年(S40)十月～十一月 「まなぶ」発刊五周年記念読者集会に出席のため、札幌・旭川を訪問。途中、小樽にも立ち寄り、小樽中学時代の知人と旧交を深められる。
- 一九六七年(S42)六月 「資本論出版一〇〇年、ロシア革命五〇周年記念集会」のため、札幌・旭川・釧路を訪れる。
- 一九六九年(S44)十一月 「レーニン生誕一〇〇年記念集会」のため旭川・札幌を訪れる。
- 一九七〇年(S45)秋 七〇年二月に亡くなられた鈴木茂三郎労働大学学監(当時)・(元日本社会党委員長)の追悼集会が札幌で催され、出席される。
- 一九七一年(S46)十月五～七日 国労反マル生第二次調査団のメンバーとして国鉄苗穂工場に入り、当局との交渉や組合員を激励される。
- 一九七三年(S48)三月二十五日～四月一日 労働大学札幌分校第一期開講のため来道。旭川・北見・釧路でも、講演会が連続して行われ、講演された。
- 一九七三年(S48)九月二十五日～三十日 労大旭川分校第一期開講に出席、引きつづき稚内・羽幌・深川・札幌を訪れ、講演会・懇談会に出席される。
- 向坂先生、最後の来道であった。(心新たに「憲法記念日」・松村清治)

◇読者からのおたより◇

国鉄闘争の勝利に向け 「連帯する会」への会員獲得!! 手づくりハム・ソーセージを全国に拡げるためがんばります。

編集部より いよいよ山場。雑音も多くなります。足場かためよう。

(帯広闘争団・S)

「**社会新党**」に展望なし 五月二十七日の臨時全国大会で新党づくりが確認されましたが、わが党が新党に衣替えをして飛躍、発展できると確信を持てる人がいるだろうか。むしろ基本政策転換によって保守化してゆくことを心配する方が大きいでしょう。新党の立脚する階級はどこになるのでしょうか。液状化基盤では崩壊だけが見えてきます。働らく者の人権重視を!

(北海道・S)

編集部より 思いは同じです。放っておけば北海道の党も太平洋ベルト地帯の二の舞です。己れの信ずる思想の具体化が急がれねばと思います。

一日も早く「**護憲社会党**」を 「自衛隊は違憲」と明言した青島知事、心ある社会党員の胸を打ったはずです。私は非党員ですが、一日も早く「護憲社会党」の再建を願うもので

す。
(八王子・N)

編集部より 「護憲社会党」への準備はユックリと着実にこなわれていると聞いています。「イザ鎌倉」のときには力合わせましようよ。

六百号に敬意 六百号達成に敬意を表します。市原市(千葉県)は市議選のまつただなかです。二人当選に向けがんばります。(市原・N)

編集部より 六百号はNさんらのご支援のおかげ。それにしても選挙残念。お疲れさま。全国の動きつなげ 情勢は全国的な動きを「つなぐ」ことが大きな柱になりつつあると思います。(品川・Y)

編集部より 時代が動いていますから。努力します。ご協力を!

新しい都市論議を神戸から 震災被災で「てんやわんや」です。いま仮住居ですが、少し落ち着き始めています。新しい都市論が神戸から起こることを期待しています。(神戸・馬部貴司男)

編集部より 神戸の状況、うかがうたびに心が痛みます。神戸から「新しい都市論」だけではなく、「日本のゆくえ」を示す必要があります。ご活躍祈ります。

一千号めざせ 六百号おめでとうございます。八百号、一千号めざしてがんばって欲しい。地方選(八王子市)では良い結果。日常活動の大事さを知りました。地域で労働相談などがんばりたい。(東京・秋川・中島)

編集部より 総括で重要なことは全体をみることです。地域での当落に目を奪われてはいけません。国政選挙と地方選では国民の目先さも違うのですから。

大衆闘争として「抜群」 皆さんのご健闘に心から敬意を表し、ますますのご発展を願っております。発刊いらいの足跡は護憲大衆闘争誌としてまさに「抜群」です。(灰原茂雄)

編集部より 奥様、お元気ですか。ごぶさたしてます。ご健康祈ります。

新党II護憲新党に疑問 社会党について自らの運動の反省をふまえて論議すべきである。にわかには新党II護憲新党に与みすることはできない。声高におっしゃる地域はこれまで五十年間、党建設を追求してきたか反省すべきである。過去にできなかったのに、それではこれからどんな運動が組織できるのか、明らかにすべきと思うのですが。(神奈川・Y)

編集部より 先の大会で社会党は「解党・新党」を決めました。各県、地域の党情勢はさまざまです。全体を見、判断し準備することが必要ではと立案するのですが…。

「五・一三解決案」には距離 六百号突破の「社会通信」がさらに鋭く労働運動高揚に向けて提言されることを願っています。JR採用差別事件で五月一三日運輸省案がだされましたが、私たち闘争団の求めるものとは距離があり、さらなる闘争強化を仲間と確認し合っています。六月上旬上京予定。(名寄闘争団・S)

編集部より 上京の際にはご連絡を。過日はメッセージ忘れごめんさい。

(山形・H)

我が愛する社会党どこへゆくか

(京都・K)

日々の努力に心から敬意。ともにがんばる。

(浦和・U)

社会党と、修善寺大会 五・二七党大会に向け個々人が何をすべきか、最後の山場だと思ひます。社会党がなくなる許せない、しかしなくなるなら引き続きがんばれる場を自分

たちで作らなければ。まさしく国労の修善寺大会前日のような感じがします。また「五・一三」に運輸省から国労に出されたと伝えられる問題も、闘争団の仲間はどう考えているのか、広域採用でこちらにきた者として気がかりです。(国労・A)

編集部より 「五・一三」、おたより中の名寄の仲間の文章をご参照ください。